

1. 国際研究施設の誘致について（リニアコライダー計画）

○十七番（平井 一三君）登壇 皆様、お疲れさまでございます。ことし市制四十周年、そして長崎街道の山家宿開設四百周年を迎えます筑紫野市選出の平井一三でございます。自民党県議団の一員として質問をいたします。通告に従いまして、国際研究施設の誘致について質問をいたします。

宇宙誕生の瞬間でありますビッグバンや、昨年話題になりましたヒッグス粒子など、素粒子物理学に関してはマスコミの報道を耳にするだけで、我々にとってはなじみの少ないところであります。現在、福岡県と佐賀県が誘致を進めておりますこの素粒子物理学を研究するための国際研究施設が、ILC（インターナショナル・リニアコライダー）であります。

リニアコライダーとは、直訳すると直線型の衝突型粒子加速器のことです。地下の強固な岩盤に掘られた延長三十一キロメートルから五十キロメートルのトンネル内で、光の速度まで加速された電子と陽電子を正面衝突させますと、宇宙の始まりの状態であるビッグバンと同様なエネルギーの塊が生み出され、さまざまな粒子が噴出します。このことから、どのようにして、そしてなぜ宇宙が生まれ、物質が生まれ、さらには人が生まれたのかといった、人類の長年のなぞの解明に臨むのがこのリニアコライダー計画であります。

二〇〇二年にノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊東大特別栄誉教授が、ニュートリノ観測に使用した素粒子観測装置スーパーカミオカンデの建設費が約百億円であったのに対し、リニアコライダーの建設費は約八千億円と莫大な額の投資が必要となります。したがって、リニアコライダーの施設は、その規模の大きさから、アジア、北米、欧州が協力し、世界にただ一つだけつくることが研究者の間で合意されています。

現在、世界の素粒子、加速器研究者で組織されました国際将来加速器委員会（ICFA）のもと、リニアコライダー建設の検討が世界規模で進められており、二〇一二年末までに候補地ごとの詳細設計書が策定される見込みだと聞いております。また、候補地は日本、スイス、ドイツ、ロシア、米国などが挙がっており、日本国内としては、五十キロメートルにも及ぶ強固な安定した岩盤を持つ福岡、佐賀両県にまたがる脊振山地と岩手県の北上山地の二カ所が候補

地となっております。研究施設誘致の目的は、アインシュタイン以来の科学革命を起こすことが期待される、世界最高水準の、そして世界でただ一つの基礎科学の世界拠点となる研究施設をこの福岡県に誕生させることであります。そして、このことから期待される効果としては、世界じゅうから研究者や技術者が集まり、日本は頭脳流出の国から頭脳集積の国として、そしてこの福岡県が国際学研都市として、最先端の科学技術発信拠点となり、大きく発展していくことであります。

また、青少年の科学への好奇心を高め、次世代の科学者や技術者が育成され、科学技術の振興、国際社会への貢献も期待できるものと考えられます。さらに、経済の活性化も期待できます。現在、世界最大級の加速器を持つ実験施設は、スイス・ジュネーブ郊外のセルンにあります全周二十七キロメートルの円形加速器であることは、御承知のとおりであります。この加速器をつくる投資金に対しては約三倍の経済効果が生じると言われております。このことから推計しますと、リニアコライダーを建設することからくる経済効果は、二兆円を優に超える計算となります。

さらに、リニアコライダーの加速器は、新素材、超精密加工、超電導技術などを駆使して整備されます。ここから生まれる技術は、IT、バイオテクノロジー、ナノテクノロジー、医療、そして環境などのさまざまな先端研究分野に応用が可能であり、先端成長産業の創出や関連産業の集積、建設産業などもあわせて、雇用の拡大が期待されます。このようなことから、この世界最高水準の研究施設を、ぜひ福岡、佐賀両県にまたがる脊振山系に誘致すべきであると、この思いから、知事にリニアコライダーに対する所見と幾つかの質問を行います。

まず一つ目は、研究施設の誘致と建設における国と県の役割はどのようになっているのでしょうか。

二つ目に、研究施設の誘致と建設における課題や問題点はどのようなものがあるのでしょうか。

三つ目に、誘致に向けた国の姿勢はいかがでしょうか。

誘致の決め手は地元の熱意であると思っております。そして、何よりも県境を越えて福岡県、佐賀県、さらには九州が一体となった誘致活動を行う必要が

あります。アジアの代表として、福岡県がすぐれた国際研究都市となり得る大きな可能性を持っていることをアピールしなければなりません。そして、地理的、文化的にも魅力的な将来ビジョンを作成し、世界の科学者に積極的に示していくなど、今まで以上に福岡県が先頭に立ってリードしていくことこそが、九州の自立に向けた大きな起爆剤になると信じているところであります。終わりに、誘致に向けた知事の強い決意をお聞きして、一般質問を終わります。（拍手）

○議長（原口 剣生君） 小川知事。

* 知事答弁

○知事（小川 洋君） 登壇 お答え申し上げます。

国際リニアコライダー（ILC）これについてのお尋ねでございます。ILCは国際宇宙ステーション、あるいは国際熱核融合実験炉（ITER）と並ぶ国際協力プロジェクトといたしまして研究者の間で世界に一カ所建設することが合意されております。このため、我が国への誘致、建設については国が主体となるわけでございます。福岡、佐賀両県におきましては、現在脊振山地の地質調査やILCを核とした国際研究都市の構想策定に取り組んでいるところでございます。脊振山地での建設が決まりますれば、県は世界から集まる多くの研究者の住居など安心して生活あるいは研究ができる環境整備を担っていくこととなります。

その実現に向けた課題と国の姿勢についてお尋ねがございました。ILCは先ほどお答えいたしましたように、まだ世界の研究者の間で検討されているプロジェクト、構想でございます。候補地を有する各国とも政府レベルでの検討がまだ行われていない状況でございます。このため、ILCを実現するためには、まずこの日本の国が国家プロジェクトとして位置づけることが必要でございます。それが当面の課題であるというふうに私は考えております。国は、二十三年度の第三次補正予算におきまして初めてILC建設の可能性を調査することにいたしましたけれども、我が国への誘致についてはまだ態度を明らかにしてない状況でございます。

誘致に向けた決意でございますが、I L Cが建設をされますと、先ほど議員も御説明をされましたけれども、世界じゅうから千人規模の研究者が集まる国際研究都市が形成されます。宇宙誕生の仕組みなどを解明する世界最先端の研究の拠点ができ上がるわけでございます。また、I L Cの建設には最先端の技術が用いられますために、幅広い産業分野での波及効果というのも期待できると考えております。県では、昨年十一月でございますが、九州・山口各県、それから経済団体にも働きかけをいたしまして、九州が一体となって取り組むプロジェクトとして体制を整えたところでございます。今後は、こうした関係機関との連携強化、地域の理解増進に努めまして、I L C実現に向けた機運、その醸成を図っていきたいと思っております。また、あわせて国に対しまして、このプロジェクトを国家プロジェクトとして取り上げていく、取り組んでいくよう働きかけをしてまいります